氏　　名	小　林　亜起子（コ バヤシ アキコ）
学位の種類	博　士　（美　術）
学位記番号	博　美　第 312 号
学位授与年月日	平成23年 3 月25日
学位論文等題目	〈論文〉タピスリー・デザイナーとしてのフランソワ・ブーシェーボーヴェ製作所のための制作活動についてー
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　教　授　（美術学部）　越　川　倫　明
（副査）	〃　准教授　（　〃　）　田　辺　幹之助
（〃）	〃　教　授　（　〃　）　松　尾　　大
（〃）	明治学院大学　〃　鈴　木　杜幾子

（論文内容の要旨）

18世紀フランスのロココ時代を彩った画家フランソワ・ブーシェ（1703-1770）は、絵画の分野にとどまらない幅広い制作活動を展開した。ブーシェは1734年、王立絵画彫刻アカデミーに歴史画家として入会し、その後要職を歴任したのち、晩年の1765年には国王付き首席画家の地位まで上りつめた。画業と並行して、アカデミー入会の年から1755年までのあいだ、ブーシェは６つのタピスリー連作の下絵をボーヴェ製作所に提供した。ボーヴェ製作所は17世紀、ルイ14世治世下、コルベールの重商主義政策のもとに設立されたマニュファクチュールであり、国王専属のゴブラン製作所とは異なり、王から認可された経営者によって個人向けの作品販売を行っていた。ブーシェは、18世紀ボーヴェ織がゴブラン織に比肩する国際的な名声を獲得する上で貢献し、その業績によって、のちには王立ゴブラン製作所の美術部門の総検査官に任命されることになった。タピスリーの下絵制作活動における経歴は、王室からの評価の上昇を密接に反映する側面があり、最終的に国王付き首席画家にいたるまでのブーシェのキャリア構築の上で、軽視できない重要性を有するものと考えられる。しかしながら、絵画、版画や素描の研究にくらべて、タピスリーの下絵については、依然として詳細な研究がなされているとはいいがたい。

先行研究においてブーシェの画業制作活動の輪郭については、アレクサンドル・アナノフによる素描目録（1966）と油彩画目録（1976）、ピエレット・ジャン＝リシャールによるルーヴル美術館ロートシルト・コレクション所蔵の版画目録（1978）から知ることができる。ブーシェ研究はその後、ニューヨークのメトロポリタン美術館とパリのグラン・パレで行われた大回顧展（1986）に代表される展覧会を通じて、飛躍的に前進した。近年では、フェミニズムの視点からブーシェの作品を論じたメリッサ･ハイド（2006）に代表されるように、社会史や文化史を視座にいれた新たな美術史研究のアプローチがみられる。しかし、これらの先行研究のなかでタピスリーを考察対象とするものは皆無に近い。

ブーシェのタピスリーについては、主に、各国の美術館所蔵品カタログの解説のなかで取り上げられてきた。たとえば、ニューヨーク、メトロポリタン美術館のエディット・アペルトン・スタンデン（1985）や、カリフォルニア、ゲッティー美術館のチャリサ・ブレマー＝ダヴィッド（1997）による作品解説がある。しかしながら、そこでは、現存するタピスリーの来歴や購買者などの情報を明示することが重視されており、ブーシェの画業や作品の制作の背景との関連性についての考察は十分とはいえない。

本研究の目的は、第一にブーシェのキャリアにおけるボーヴェ製作所のための制作活動の位置づけを明らかにするとともに、研究史の重要な課題として残されている、タピスリー・デザイナーとしてのブーシェの業績を再評価することにある。

論文の考察対象となる６つのタピスリー連作の基本情報については、現在、フランス国立動産管理局に所蔵される、ボーヴェ製作所の一次史料である記録簿の現地調査、および、ジュール・バダン（1909）によるボーヴェ製作所に関する基礎研究、その後刊行された各国の美術館カタログや個別研究を参照する。

本論文は８つの章によって構成される。Ⅰ章では、タピスリー・デザイナーとしてのブーシェについてさまざまな角度から観察する。まず、ボーヴェ製作所の創設からブーシェの制作活動時期までの歴史的変遷を概観したのち、ボーヴェ織りとゴブラン織りの主題傾向、およびブーシェの連作の主題選択上の特徴を考察する。さらに、タピスリーの購買者と下絵の価格について検討する。

Ⅱ章からⅦ章においては、ブーシェがボーヴェ製作所のためにデザインした６つの連作についてとりあげる。すなわち〈イタリアの祭り〉(1736)、〈プシュケの物語〉(1741)、〈中国主題のタピスリー〉(1743)、〈神々の愛〉（1747-1748)、〈オペラの断章〉（1752)、〈高貴なパストラル〉（1755）である。各章の序節では、ブーシェの画業における下絵制作活動の位置を跡付けるために、各連作が構想された時期のブーシェの画業と同時代評価を明示する。後節では、時代背景を視座にいれた作品考察を行い、着想源や図像解釈を新たに提示したい。一連の考察を通じて、理想的な宮廷画家として栄達の頂点を極めたブーシェにとって、タピスリー・デザイナーとしての経歴がどのような意味をもっていたのかが浮き彫りとなる。Ⅷ章では、ブーシェがボーヴェ製作所のために下絵を提供していた1730年代から1750年代のブーシェに関する批評のなかから、タピスリーに関する同時代評価を中心に考察する。

以上、本研究の意義は、タピスリーという装飾美術の領域におけるブーシェの業績を見直し、これまでの研究上の大きな欠落を埋めることにある。18世紀フランスにおいて、装飾美術は絵画や彫刻に比肩するステータスを保持していた。しかし、絵画・彫刻を優位とする伝統的な芸術観が主流をなす西洋美術史研究において、工芸品に光があてられることは決して多いとはいえない。このような研究状況において、本論文は18世紀のタピスリーを装飾美術の歴史のなかで再評価することにも寄与するものである。

（博士論文審査結果の要旨）

本論文は、フランス18世紀の画家フランソワ・ブーシェによる、タピスリー下絵制作活動を研究対象としたものである。ブーシェは1736年から1755年にかけてボーヴェ製作所のために継続的に下絵を提供し、その後、王立ゴブラン製作所に下絵を提供するようになった。本論文は、ブーシェの芸術家としての地位が高まっていく時期にあたるボーヴェ製作所での活動期に焦点をしぼり、この期間に制作された全６種の連作をすべてとりあげて、詳細に論じたものである。

論文構成は全８章から成り、第一章で序論を述べ、第二～七章で６つの連作についてそれぞれ詳説し、最後の第八章で同時代の批評におけるブーシェ評価を扱っている。第一章においては、ボーヴェ製作所の歴史と経営ポリシー、主題の選択傾向、顧客層の特徴など、ブーシェの作品を考察するための基本的背景を詳細かつ丁寧にまとめた。特に、ブーシェの初期の経歴とボーヴェ製作所の顧客層との密接な関連性を指摘した点は重要である。

第二章は最初の連作「イタリアの祭り」（1736）を扱う。冒頭で、この時期までのブーシェの経歴と評価をまとめたうえ、新しい知見として、本連作がフランドル系の「テニエール」と呼ばれる風俗主題タピスリーの伝統を直接的に受け継ぐものである事実を指摘した。同時に、17世紀後期以降の絵画論を詳細に参照することにより、ブーシェがどのような方針で「テニエール」の伝統的表現を絵画的に改変し、同時代の趣味に合致する表現を生み出したかが分析されている。

第三章では、２番目の連作「プシュケの物語」（1741）が論じられる。ここでは、主として現存するエスキースと最終的な構図を参照しつつ、ブーシェが利用した視覚的着想原について新しい指摘がなされている。続く第四章は連作「中国主題のタピスリー」（1743）をとりあげ、先行する同主題の連作との比

較から、牧歌的風景画の構成原理を巧みに適用したブーシェの構図の斬新さを指摘している。

第五章では、ブーシェによる最初の本格的な神話主題のタピスリー連作「神々の愛」(1747) について論じられる。ここでは筆者は、特に先行する同種の連作に例のない主題選択に注目し、《アポロンとクリュティエ》および《バッコスとエーリゴネ》について詳細な図像分析を展開する。その結果、これらの作品が同時代の王室の状況に密接に関連した、特殊な暗示性と称揚の意図を含むものであることを明らかにした。筆者はこの事実を、王室との強力なパトロネージ関係を確立していくためのブーシェの戦略的な選択であると解釈し、同時代の宮廷の政治的・私的諸状況と照らし合わせることによって、説得的な作品解釈を展開している。

第六章では連作「オペラの断章」(1752) が扱われるが、この章の論述は第五章の内容と緊密に連続し、主題の選択と造形上の特徴を、ブーシェのキャリア構築上の戦略という観点から分析している。《ルノーの眠り》の分析では、当時の宮廷の主席画家コワペルによる関連主題のタピスリーに対する対抗関係が新たに説得的に指摘され、また《イセの眠り》に関しては、ブーシェの主要なパトロンであったポンパドゥール夫人への言及性が明らかにされている。

第七章ではボーヴェ製作所のための最後の連作となった「高貴なパストラル」(1755) が論じられ、伝統的に自然景を得意としたボーヴェ製作所の傾向と、牧歌的風景画に新しい境地を拓いたブーシェの芸術的個性との巧みな合致を示す作品として位置づけられる。最後の第八章では、同時代の絵画論および美術批評を概観し、ブーシェに対する評価の性格と変遷の様相がまとめられている。

以上のように、本論文はほぼ20年間におよぶボーヴェ製作所におけるブーシェの下絵制作活動について、その全貌を詳細に論じた内容となっている。過去のブーシェ研究において、タピスリー下絵画家としてのブーシェを包括的に扱った研究は国際的にも前例がなく、この点に本論文の第一の意義が認められるであろう。第二に高く評価すべき点として、論述の随所において、これまでの研究で検討されてこなかった作品解釈上の諸問題について、まったく新しい知見を提示していることが挙げられる。たとえば、連作「神々の愛」の図像分析では、関連する視覚的史料と文献的史料を広く精査することにより、当時の歴史的文脈に沿った作品解釈を鮮やかに導きだしている。

ボーヴェ製作所での制作活動を一貫した視点から論じた結果として、本論文は、従来ともすれば二次的な関心しか向けられてこなかった下絵制作の活動が、画家のキャリア構築においてきわめて重要な場であった事実を的確に論証することができた。筆者の論述は、全体としてふたつの興味深い文脈を浮かび上がらせることに成功している。第一に、ボーヴェ製作所の伝統であった風俗的・風景画的傾向の強い制作指針のなかに、洗練された牧歌的風景の造形イディオムを導入することでブーシェが大きな成功を収め、慢性的に困難な状況にあった製作所の経営の立て直しに貢献した点である。第二に、ゴブラン製作所とは異なり原則として不特定の顧客に製品を販売していたボーヴェ製作所で活動しながら、ブーシェが作品構想のなかに王室への巧みなアピールを織りこみ、やがて主席画家の地位を獲得するにいたるプロセスの重要な足がかりとしていた事実である。これらの成果は、審美的趣味の点で大きな転換期を迎えつつあった18世紀なかばのフランスの美術界の状況を照らし出す上で、非常に意義ある貢献といえるであろう。

以上から、本論文の主要な目的として筆者によって定義されている「ブーシェのタピスリー作品の再評価」は、十分に達成されたとみなすことができる。もちろん、弱点と考えられる点がないわけではなく、たとえば第八章における同時代批評の分析は、対象である18世紀を前後にはさむ17、19世紀の理論的・批評的傾向をふまえたいっそう広い見地から考察することによって、さらに有効な議論に深めていくことが望まれるであろう。とはいえ、本文600枚を超えるこの労作は、過去のブーシェ研究の欠落部分を埋める独創的な貢献であり、基礎研究としての高い価値を有する研究成果として評価することができる。

（総合審査結果の要旨）

論文の内容に関連し、最終試験として行った口述試問において十分な学力が確認されたため、論文審査とあわせ、総合的に課程博士学位審査を合格と判定する。